

ミステリ読書案内

2023. 3. 7 発行元

第454号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

最近出た本の中から

最近になって出版された本の中から4冊を紹介する。いつものがらのシリーズものを中心に。鳴神響一は出版が連続しているの、この紙面に毎月顔を出すことになる。執筆速度が特別に速いのだと思う。

読みやすい本は有難い

こうして本の紹介をしていると、ある程度本の数を読みこなさないと文が書けないことになる。そんな時、読みやすい作品は本当に有難い。

長い間、仕事が主でミステリは従の生活をしてきた私には「読みやすさ」は重要なポイント。「教員」の仕事をしていると、勤務時間が長いのは当たり前で、なおかつ家に帰っての「持ち帰り仕事」も多い。「明日の授業の展開をどうしようか」などと考えると、生活時間のすべてが

「仕事」100%になってしまう。わずかに生まれた時間で読書しようとする、読む「読みやすい本がよい」が当然の結論になる。

「シリーズもの」は登場人物のレギュラー陣は頭に入っているし、ストーリー運びも会話や行動の流れもパターンに嵌まっていることが多い。私が「シリーズもの」を重宝する所以となる。

今は無職になったので、覚悟さえ決めれば「大作」も読めるが、長年の習性はそう簡単には変わらない。「読みやすい本」を求めている。

矢月秀作「もくろ新章 昂星」

1月に中公文庫から出た本。シリーズ通算11作目。『新章』としては4作目になる。

新型コロナの影響で沖縄は大幅に人出が抑制され、仕事によっては大打撃を受けたところもあった。そんな中、安達竜星の母・紗由美のコールセンターに出向で来ていた社員が行方不明になってしまった。紗由美とその周りの人達が情報を集めに動き出すのだが…。そこに立ちはだかるのが…。

読みやすい文と展開でスピードがあり、400ページもあつという間に結末に行ってしまう。後半はいつものがらのアクションの連続。本書で『新章』の第一部は終了のようだ。竜星の今後はどうなるのだろうか。続編に続く。

塔山郁「薬は毒ほど効かぬ 薬剤師・毒島花織の名推理」

昨年12月に宝島社文庫から出た本。シリーズ5冊目。このシリーズ予想以上に良い出来だ。落ち着いた書き方で、構成もしっかりよく考えられている。一応短編集の形式になっているが、話は続いており、毒島さんと爽太との関係もゆっくりゆっくり進展している。4巻目に当たる『病は気から、死は薬から』が特に面白い。

本書はホテルマンの爽太君が「どうめき薬局」の毒島さんたちと伊豆の山中に旅行に出掛けるところから話が始まる。その宿はデジタル機器から離れて、リラクゼーション体験を売り物にしている。ストレス、うつ病などの関連から、アロマセラピーやヨガ、ハーブオイルなどが登場してくるが、私の興味とはちょっと合わない。

鳴神響一「脳科学捜査官真田夏希 サイレント・ターコイズ」

1月に角川文庫から出た本。毎月のように新刊が出るので、毎回取り上げていく形になってしまう。『真田夏希シリーズ』の十五巻目になる。今回は夏希の持っているコミュニケーション・ロボットが指示に従わない暴走状態になるところからスタートしている。アルマロスと名乗る人物から、「IoTデバイスを次々にクラックする」との脅迫メールがサイバー特捜隊に届き、日本各地で混乱が引き起こされる。最初は犯人の目的が見えず特捜隊も右往左往してしまう。夏希の思い付きから糸口が見え始め、一気にクライマックスへと話は展開していく。

谷 瑞恵「あかずの扉の鍵貸します」

おとし(2021年)の10月に集英社から出た本。谷瑞恵の作品はミステリかミステリでないか外観から見分けるのは難しい。本書は題名からミステリだと判断してみた。「あかずの扉」と言っても、別に「密室」には関係ない。北鎌倉にある「まぼろし堂」と呼ばれる館が話の中心になっている。主人公は大学生の水城朔美。親代わりだった人に頼まれて幻堂設計事務所を訊ねる。そこは通称「まぼろし堂」と呼ばれる建物で、複雑な入り組んだ造りが特徴であった。ここでは秘密にしたいものをしまっておく「あかずの扉」の鍵を貸してくれるという。館の主の幻堂風彦に会って事情を話すと快く引き受けてくれた。そして、この建物に興味を持った朔美は一部屋を借り、共同生活をするようになる。たくさんの部屋があり、開かない扉もあり、ここには不思議が一杯詰まっているように見受けられた。館に隠された過去を探る旅。最初は偏屈そうに見えた住人も少しずつ気持ちが通じるようになり…。谷瑞恵流のファンタジックな物語。